

松井田町文化財調査報告書第8集

# 小日向遠地谷戸遺跡

—(一) 長久保・安中線改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書—

1994

群馬県松井田町教育委員会

# 小日向遠地谷戸遺跡

—(一) 長久保・安中線改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書—

1994

群馬県松井田町教育委員会



II区2号住居跡出土土器

## 序

松井田町の西端、長野との県境に位置する碓氷峠は、急峻険阻な峠々が古来より幾多の旅人を苦しめ、またそれ故に峠越えの人々の物語も生み出しています。訪人として旅立つ万葉人の歌をはじめ、東山道から中山道と続く時間の中で創られた道筋の石仏や宿場などは現代の私達に往時の面影を偲ばせ、浪漫をかきたてるものでもあります。近代には、日本初のアプト式鉄道が碓氷の坂を越えたことで表日本と裏日本の動脈として発達し、「鉄道のまち」松井田を築き上げてきました。開業100周年にあたる平成5年には、この旧碓氷線のレンガアーチ橋5基が近代化遺産としては日本初の国重要文化財に指定されています。上信越自動車道の開通とあいまって、このような新旧文化がクローズアップされることを見ましても、私達は歴史をいかに据えて未来を展望するべきかと感じずにはられません。

さて、このたび刊行いたしました「小日向遠地谷戸遺跡」は、群馬県による県道改良工事に伴う事前の発掘調査で発見された遺跡の報告書であり、町教育委員会における第8集となります。ここでは弥生時代後期の土器ならびに住居跡が検出されましたが、本町での数少ない弥生遺跡の一つであるとともに遺物が充実しており、地域の歴史解明のうえで非常に貴重なものであります。

遺跡は「記録保存」の名のもとに消えてゆきますが、残された資料を有効に活用し、後世に伝えてゆくことが現代に生きる私達の責務であり、このことは先に述べましたように未来を創ってゆく基礎となるものであると考えます。

最後になりましたが、発掘調査に参加した方々ならびに本書刊行に至るまでご協力をいただいた関係各位に心より感謝を申し上げ、序といたします。

平成6年3月

松井田町教育委員会

教育長 稲塚 勇

## 例 言

- 1 本書は、一般県道長久保・安中線の特定交通安全施設等整備工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査地は群馬県碓氷郡松井田町大字小日向字遠地谷戸1,155-1 他である。
- 3 調査は群馬県安中之木事務所の委託を受けて松井田町教育委員会が実施した。
- 4 費用は原因者である群馬県がその全てを負担した。
- 5 調査期間 ・発掘調査 平成5年6月28日～8月10日  
・整理作業 平成5年8月11日～平成6年3月30日
- 6 調査スタッフ・発掘調査 担 当：出口 修（教育委員会社会教育課）  
作業員：野田 逸也 野田 絹子  
野田 貞雄 都丸 孝江 廣瀬 若江  
・整理作業 担 当：出口 修（編集、執筆）  
補助員：佐藤 友江 都丸 孝江 廣瀬 若江
- 7 遺物の分類については佐藤 明人氏（群馬県教育委員会）より多くのご教示をいただいた。
- 8 出土遺物、資料類は松井田町教育委員会が保管している。

## 凡 例

- 1 遺構図の縮尺は1：60で統一した。
- 2 遺構図の方位記号は磁北を指す。
- 3 遺構図の断面基準線は海抜標高を示す。
- 4 遺物図の縮尺は1：4とし、それ以外のものは各図に記してある。
- 5 本文と写真図版の遺物番号は一致する。
- 6 遺物実測区のスクリントーン（網点）は赤色塗彩部分を示す。

# 目次

巻頭写真図版

序

例言、凡例

## 第1章 調査の経過

I 調査にいたる経緯……………1

II 調査の経過……………1

## 第2章 遺跡の位置と環境

I 立地とその周辺……………2

II 層序……………4

## 第3章 検出された遺構と遺物

I 1区(1号住居跡)……………5

II 2区(2号住居跡)……………7

## 第4章 まとめ……………22

抄録

写真図版

## 挿図目次

図1	調査区配置図……………1
図2	松井田町の丘陵と河岸段丘……………3
図3	周辺遺跡分布図……………4
図4	基本層序模式図……………4
図5	1号住居跡実測図……………5
図6	1号住居跡出土遺物……………6
図7	2号住居跡実測図……………8
図8	2号住居跡出土土器・石分布図 ……9・10
図9	2号住居跡出土遺物(1)……………11
図10	2号住居跡出土遺物(2)……………12
図11	2号住居跡出土遺物(3)……………13
図12	2号住居跡出土遺物(4)……………14
図13	2号住居跡出土遺物(5)……………15
図14	2号住居跡出土遺物(6)……………16
図15	2号住居跡出土遺物(7)……………17

図16	2号住居跡規模推定図……………22
図17	群馬県内の6本主柱とされる樽期住居……………23

## 表目次

表1	1号住居跡出土遺物観察表(1)……………6
表2	1号住居跡出土遺物観察表(2)……………7
表3	2号住居跡出土遺物観察表(1)……………18
表4	2号住居跡出土遺物観察表(2)……………19
表5	2号住居跡出土遺物観察表(3)……………20
表6	2号住居跡出土遺物観察表(4)……………21
表7	群馬県内の6本主柱とされる樽期住居の概要……………23

# 第1章 調査の経過

## I 調査に至る経緯

平成4年6月22日、安中土木事務所管内の工事予定地のひとつである当町小日向地区の現地確認調査が群馬県教育委員会文化財保護課により実施され、弥生土器、土師器の散在が確認された。同年11月25日から27日、該地に町教育委員会立会いで県文化財保護課が試掘調査を実施したところ、弥生時代後期土器を伴う住居跡の存在が明らかになった。町教育委員会では遺跡発見通知を提出して遺跡の周知を図ると共に、県文化財保護課、安中土木事務所及び町教育委員会の間で工事計画と埋蔵文化財の保存措置について協議がなされた。工事は交通安全施設（歩道）整備として既に隣接地域まで終了しており計画変更は不可避との状況により、記録保存のための発掘調査を実施することになった。その後、日程の調整及び予算等について安中土木事務所と町教育委員会とで数回の協議を行ない、工事主体者である群馬県と松井町との間で平成5年5月28日付けで埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、これに基づいて調査が開始された。

## II 調査の経過

調査対象地は、試掘調査で確認された住居跡部分2箇所と桑置で遺構確認ができなかった一部とし、未掘部分については結果を見て拡張の判断をつけることにした。

まず両機で遺構確認面やや上までの土を除去したが、渠道脇であるとともに工事区域が狭いために、掘削した土を山にして道路側に流出しないように固めた。確認トレンチ部分では弥生土器片が検出されたので本調査区として拡張することになった。この時点で東側（安中側）を1区、西側（小日向集落側）を2区と命名し、1区から精査を開始した。1区では西壁以外は攪乱や区域外であったが床面はしっかりしており（1号住居跡）、少量ながら弥生後期の土器を伴うものであった。2区

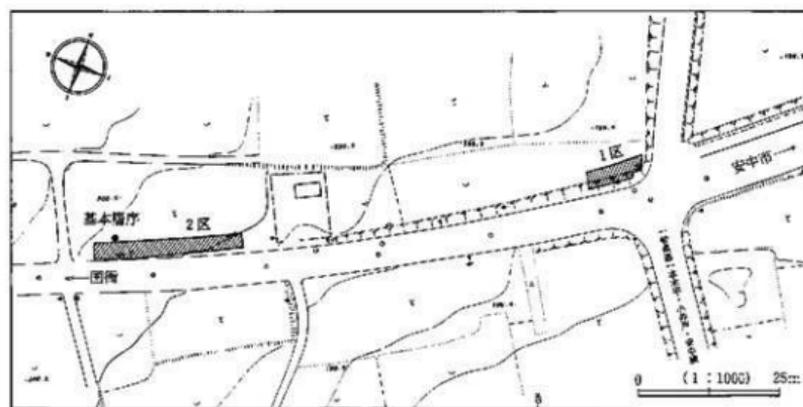


図1 調査区配置図

では確認されていた落ち込みの一部よりも上面で土層が集中して出上り始めたため、これらの図化及び撮影を行ないつつ徐々に面を下げ、確認用サブトレンチで東壁プランを検出した後に2号住居跡として床面までの精査を進めた。上層観察は区域が狭いことや住居プランが部分的にしか確認できないことなどから一文字とし、2号では調査区の壁を地表からの通しのセクションベルトとして利用した。土坑は半割を基本としたが深い部分では二質を見ながら全掘せざるをえなかった。区化は平面、断面ともに遺構図を1:20で平板実測し、遺物は基本的にドットで位置を示した。また、工事用標杭を図示することで平面位置を押さえることとした。ベンチマークは工事用図面の等高線を参考に現地で任意のポイントを決めて算出したもので、精度は10cm単位が限界である。記録写真には白黒カラーとも35mmネガフィルムを使用した。8月6日に調査区の全体図及び撮影を行い現場作業は終了、8月10日に重機で掘削範囲を埋め戻して全ての作業が完了した。

調査期間中は雨が多かったために中断が多く、掘削土の崩落や泥で覆われた部分の再精査などで作業は難航した。また、交通量が思いのほか激しく、道路側での写真撮影では注意を要するものであった。しかしながら、日につきやすい場所とあって多くの見学者が訪れて関心を寄せてくれたことは、文化財の理解、公開という点ではラッキーであったと感じている。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### I 立地とその周辺

松井田町は北西部から南西部にかけて1000m級の山々に囲まれている。この一帯からは数多くの小川が流出しており、これらは合流を重ねつつ木町東部の平野部に至り、隣接する安中市へ流入する幾筋かの河川となっている。町南部を流れる碓氷川は、町西端の長野県境に端を秀してから碓氷峠の山中を経て、妙義山より派生する西横野丘陵北側を東流する。流域両側には左岸に1段(中位)、右岸に上下2段の河岸段丘を形成している。この両岸の段丘面が本町での主たる居住区域であり、中山道(現国道18号)やJR信越本線などの幹線が通るところでもある。中位段丘面の北側に縦長く延びているのが松井田丘陵、そしてさらに北側に細野丘陵と続くが、丘陵間には九十九川が東流し、細野丘陵東端で北からの着田川を合わせて安中市後閑へと向かう。この一帯は西の細野丘陵、南は松井田丘陵、北を長者久保・上野丘陵にそれぞれ囲まれた低湿地となっており、九十九川左岸に形成された上下2段の河岸段丘面を基盤としている。九十九川側の下位段丘面は増田川との合流地点より川沿いに200~300mの幅で北東方向に展開し、小日向地区の集落の東方では段丘中央付近に細長い微高地が形成されている。現在ここは主に畑地として利用され、河川の低湿地は水田が営まれている。小日向遠地谷戸遺跡はこの微高地を縦貫する泉流の脇で確認され、標高は約200mである。北側と1m、南側の湿地とは6~7mの比高差を計り、真北150mには標高250mの長者久保・上野丘陵東端部が迫り、南東は6mを境に低地となり20mで九十九川の流路となる。さらに南には松井田丘陵東端(標高260m)が延びてきている。このように南北を塞がれ東西に開けた低湿地の微高地に本遺跡が立地している。西方300mには同微高地上に高梨子の滝集落、東方は隣接する安中市(200m)に至り後閑川北側に後閑の集落が存在している。

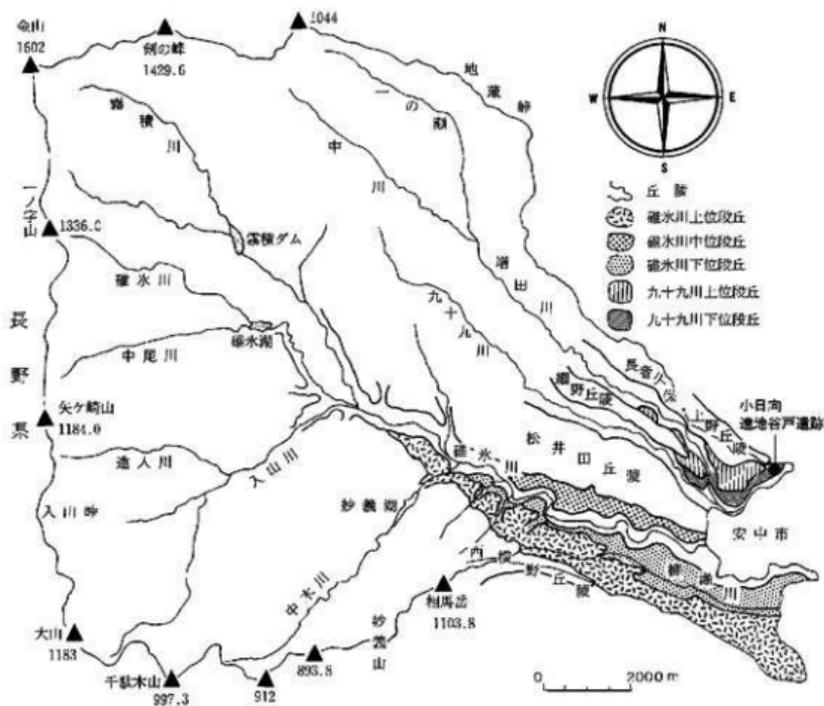


図2 松井田町の丘陵と河岸段丘 (『松井田町誌』掲載図を複製)

さて、次に遺跡地周辺で確認されている遺跡の状況について概観する(図3)。1は細野丘陵に立地する縄文前期の遺物包含層を主体とする遺跡で、平成5年の調査で黒浜～諸磯期の土器及び平安時代の住居跡1軒が検出された。2は松井田丘陵北麓で弥生～平安時代の土器が表採されている地点である。3、4は国衙遺跡群として捉えられるもので、共に九十九川左岸の下位段丘面に立地する。3は昭和60年の調査で縄文後期柄鏡形住居跡、古墳後期山寄式円墳、江戸末期寺院跡が検出された。4では昭和62年の調査で縄文中期から後期の遺物及び弥生中期から後期の住居跡、古墳後期住居跡、平安時代住居跡等が確認された。5は九十九川上位段丘に位置する縄文から平安時代にかけての土器分布地域である。6の1帯は古墳後期の小円墳が集中する小日向古墳群として従来よりよく知られている。7は戦国期において松井田城の東北の出城として築かれたとされる砦跡である。8は古代から中世に幹線として機能した東山道の該地でのルートを示したが、流の集落で九十九川を渡らずに左岸をそのまま後関方向へ向かうという脱も存在する。いずれにしても発掘調査による遺構の確認などはなされていない。9は平成元年に安中市教育委員会が調査したものであるが、ここでは浅間B軽石層(1108年降下とされる)下の平安時代水田跡が良好な状態で検出されている。

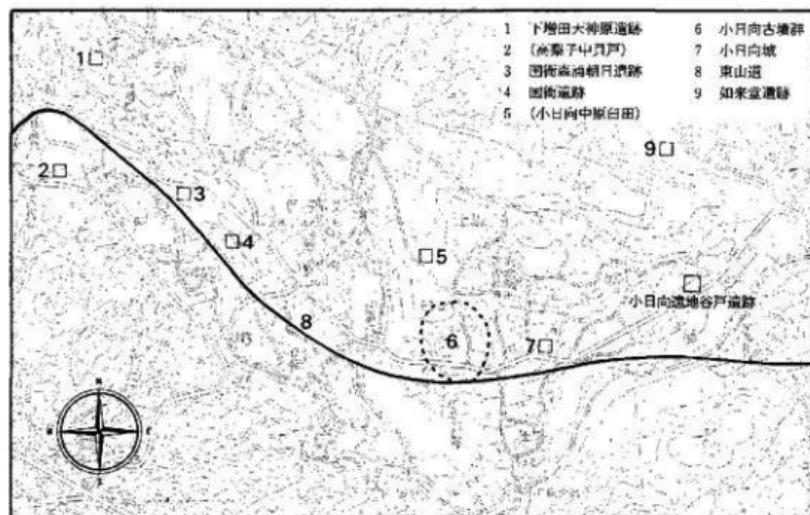


図3 周辺遺跡分布図 (1 : 25000)

また、図示してはいないが、小日向遺地谷戸遺跡一帯の微高地上の畑地では縄文から弥生時代の土器の分布が伝えられており、付近には該期集落の存在する可能性が高いと言える。

## II 層序

- 1層：表土（耕作土）。軽石粒・微粒（As-A及びB）を多く含む  
まりのない砂質の灰黒色土。
- 2層：旧耕作土。同上軽石微粒を疎らに含むやしまった灰黒色土。
- 3層：As-B微粒を疎らに含む黒色土。
- 4層： // 全体に含む真黒色土。よくしまる。
- 5層：黄色軽石粒及び炭化物粒を疎らに含む暗褐色土。比較的柔らかい（2住第2次覆土）。
- 6層：黄色軽石粒及び炭化物粒を全体に含む、やや明るめの暗褐色土（住居第1次覆土）。
- 7層：所謂ソフトローム層。小礫及びローム粒が含まれる（住居地山・床面）。

- ・As-A……………浅間A軽石、1783年降下とされる。
- ・As-B……………浅間B軽石、1108年降下とされる。

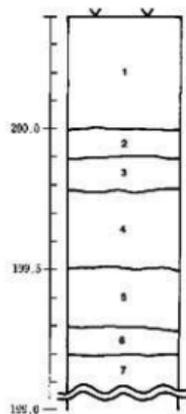


図4 基本層序模式図

### 第3章 検出された遺構と遺物

#### 1 1区

遺構は住居跡1軒（1号住居跡）のみ、遺物は住居プラン内のもの以外に土器小片十数点が出土している。調査面積は33㎡である。

##### 〈1号住居跡〉

**形状** 西壁の一部が直線的に残るのみで全体は不明。

**規模** 西壁より東側覆土部分まで4.9m、南北は2.6mが残存する。確認面から床面までは約40cmを計る。

**炉** 検出されない。

**覆土** サブトレンチで確認したところ図5のように一層となった。このうち第2層は小礫の混在する黄褐色ローム層で全体に硬くしまっており、本層上直が床面と考えられる。第3層はしまった暗黒色土層であり、当初はこれを地山とする掘り込みに第2層を貼床としてのせたものと考えていた。しかし2と3の層理が不明瞭であること、2が自然堆積のロームのようで黒色土等の混じりがないこと、唯一残る西壁が3ではなく2と同様のロームであること等から、本住居は貼床はなく、覆土は一層のみであると考えたい。よって2と3の境は自然の層理で、ロームと黒色土が何らかの理由で逆転しているものと考えておく。

**土坑** 床面より掘り込まれるもの3基を確認した。P1は推定径80cm程の円形で深さは床面より40cm、覆土はしまりのない暗褐色土の単層で住居覆土とは異質である。遺物や焼土、炭化物等は全く含まれず下位には数個の自然礫が入る。P2とP3は近接する小土坑で共に長径

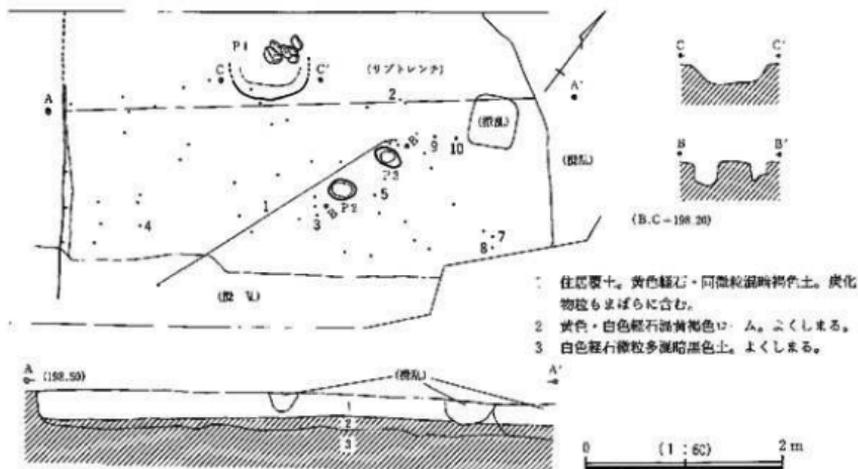


図5 1号住居跡実測図

25~30cm、深さはP2が45cm、P3が30cmで覆土は単一（生居覆上の1層に同じ）である。遺物は伴っていない。

**遺物** 覆上上へ下位より約百点の土器小片と石斧（片）2点が出土。また、主に中位に拳大程の不整形な円盤が多く見られている。土器は壺、台付壺、壺、高坏で破片での割合としては壺4、壺4、高坏1、台付壺1といったところである。

**備考** 伴出遺物より弥生時代後期の所産といえる。

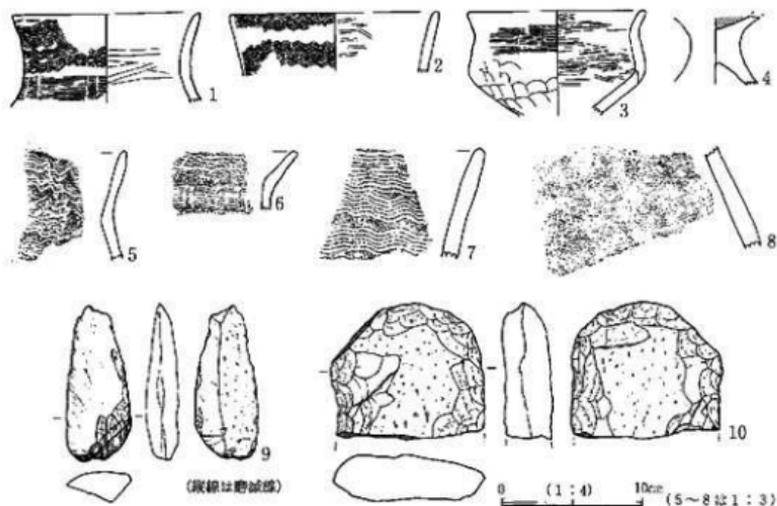


図6 1号住居跡出土遺物

表1 1号住居跡出土遺物調査表(1)

No.	器種	法 壺 (cm)	形 態	文様・調整など	色 調	残存
1	壺	口(13.4) 高—— 底—— 壺——	腰やかに外反する 口縁部	口縁部は波状文、頸部に2道止帯状文。 内面は雑な横ヘラミガキ	外 淡褐色 内 淡褐色	口縁 半周
2	壺	口(15.0) 高—— 底—— 壺——	僅かに外傾する口 縁部	口縁上端と下位に波状文、口唇に横文を付す。内面横ヘラミガキ	外 暗褐色 内 赤褐色	口縁 少々
3	小型 台付壺	口(12.5) 高—— 底—— 壺——	同上位が帯る厚手の壺。口縁外反	頸部に腐状文、胴部以下は斜かな縦ヘラミガキが残る。内面横ヘラミガキ	外 淡褐色 内 淡褐色	20%
4	高 坏	口—— 高—— 底—— 壺——	厚手の高坏底へ加部片	坏部内面赤彩	外 淡褐色 内 黒色	20%
5	壺	口—— 高—— 底—— 壺——	やや内傾気味に立ち上がる口縁部	外面は波状文、内面は横ヘラミガキと思われる	外 淡褐色 内 淡褐色	少々
6	壺	口—— 高—— 底—— 壺——	外反する口縁部	口縁は起伏の小さい波状文、頸部は腐状文	外 淡褐色 内 淡褐色	少々

表2 1号住居跡出土遺物観察表(2)

No	器種	法 量 (cm)	形 態	文 様・調 整 など	色 調	残 存
7	甕	口——底—— 高——幅——	外観する大型の深 口鉢	波状文が充塞される	外 暗褐色 内 黒灰色	少々
8	甕	口——底—— 高——幅——	胴上半部と思われ る	内外面とも横～斜めハケナア	外 淡褐色 内 淡褐色	少々
9	石 斧	全長 11.3 厚さ 2.2	幅 4.5 重量 110g	側縁部に調整らしき痕跡があるが明瞭ではない。創めの端部(刃部か)が 磨耗し、使用痕と見られる。自然面を一面残す。安山岩。		完 形
10	石 鏃	長さ 9.8 厚さ 3.2	幅 10.8 重量 50g	石鏃の基部と思われる。縁辺は表面から調整を加え、それ以外はともに自 然面を残す。燧石安山岩。		基部片

・10の法量は残存値である。・9、10とも法量は最大値を引測してある。

## II 2区

区域南西端で住居跡が1軒検出されたのみである。遺構外では土器片が数十点出土した。調査面積は73m<sup>2</sup>である。

### 〈2号住居跡〉

**形状** 部分的に破が検出されたのみであるが、図示したように平行のラインであることと北西にコーナーらしき部分が見られることより、長方形になると思われる。

**規模** 上辺より、南北6.6m、東西は不明である。壁高は南西コーナーで35cm、北壁で20cmが残るが、セクションでは各々50cm、30cmが確認できた。

**炉** 検出されない。

**覆土** セクション図の第5、6、7層及び土坑内覆土である。層理より自然堆積による埋没と見られる。

**床面** 小礫及びローム粒を全体に含む、程々にしまりのある黄褐色ローム層。貼床は検出されない。

**土坑** 床面から掘り込むもの3基を確認した。3基ともに非常に深く完掘は不可能であったが、ボーリングによってそれぞれ1m程と推定される。いずれも床面より20cm以下は外側にオーバーハングしており、P3は少々斜面に斜めに掘り込まれる。床面での平面径はP1とP3は約20cm、P2は25～30cmを計り、P2では標面が垂下する東側以外は深さ20cmの所でテラス状に段が巡っている。土坑内の遺物は検出されない。覆土は同一で、ローム粒及び炭化物粒を含むしまりのない粘質黒色土である。これらの土坑はその規模や検出位置から本住居に伴う柱穴と考えられる。

**周溝** 南壁部及び北壁の一部に検出された。上端径は7～8cm、深さは3～4cmと小規模であり、僅かな溝状の凹みといったところである。

**遺物** ナンバリングした土器片は488点でそれ以外のものを含めると約600点程である。石は200個強を数え、全てが自然石で石器と考えられるものはない。また炭化材とみられるブロックが4箇所確認された。土器、石とも住居中央付近かつ覆土中に集中する傾向が見られ僅かに確認された北壁側では非常に少ない。石の大きさや配置、また赤変などには格段の特

殊性は見られない。

備考 伴出遺物より弥生時代後期の所産と考えられる。

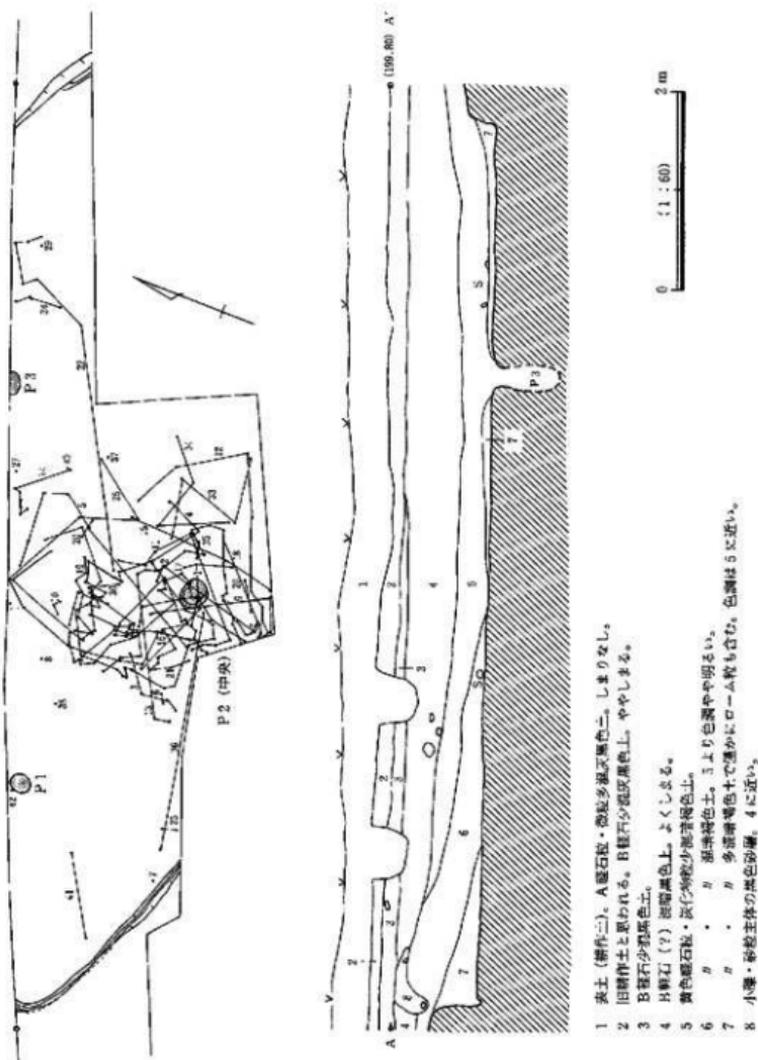
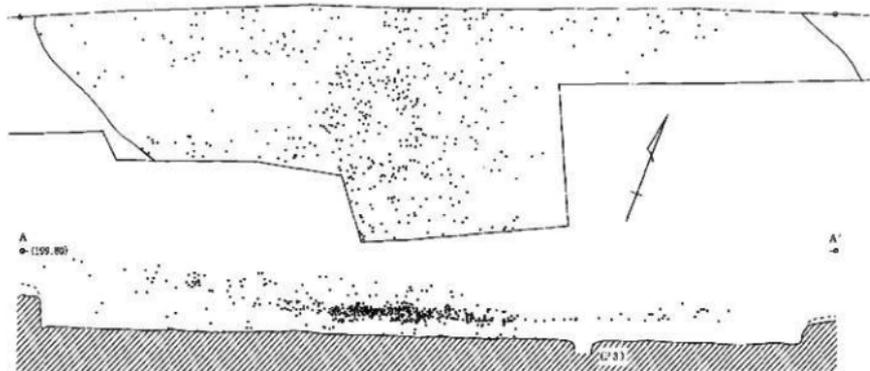
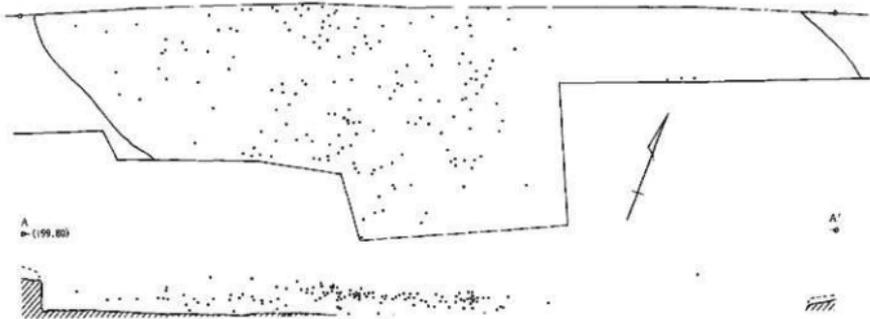


図7 2号住居跡実測図



(土器片出土位置)



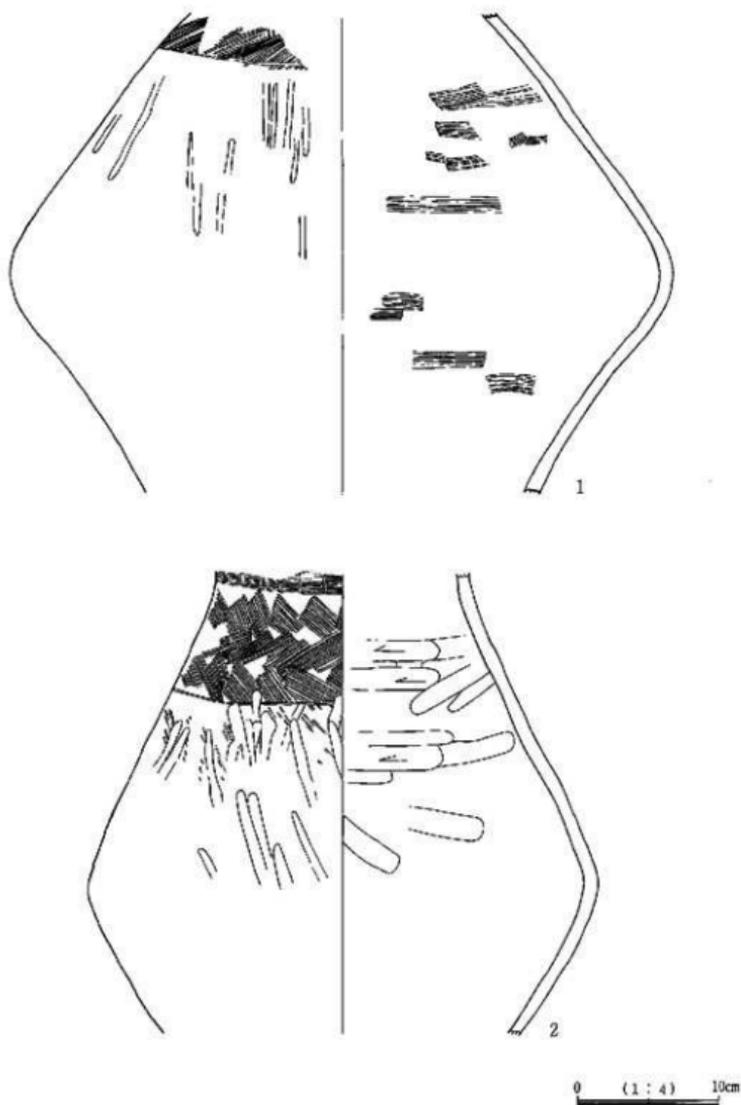


图9 2号住居跡出土遺物(1)

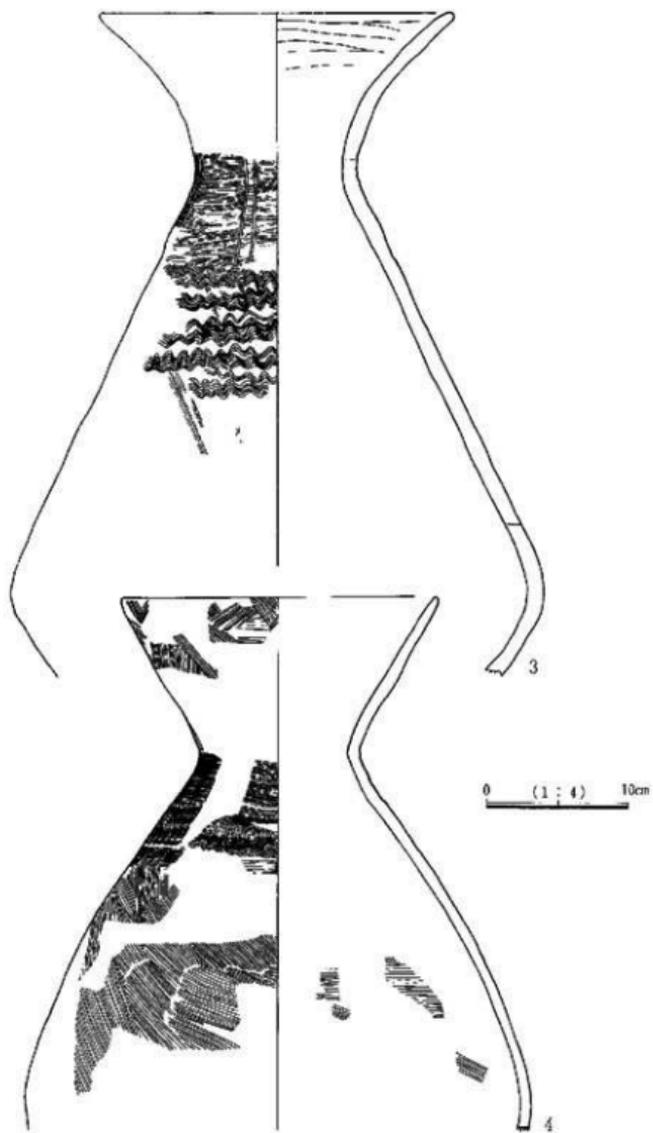


图10 2号住居跡出土遺物(2)

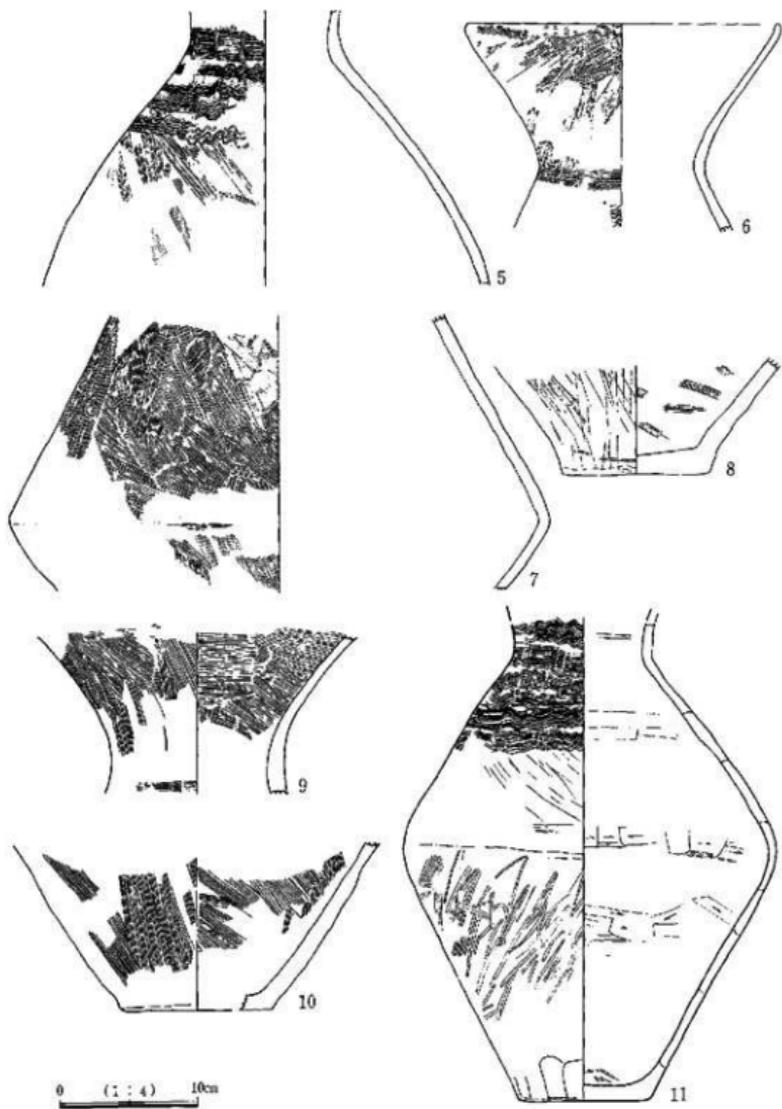


图11 2号住居跡出土遺物(3)

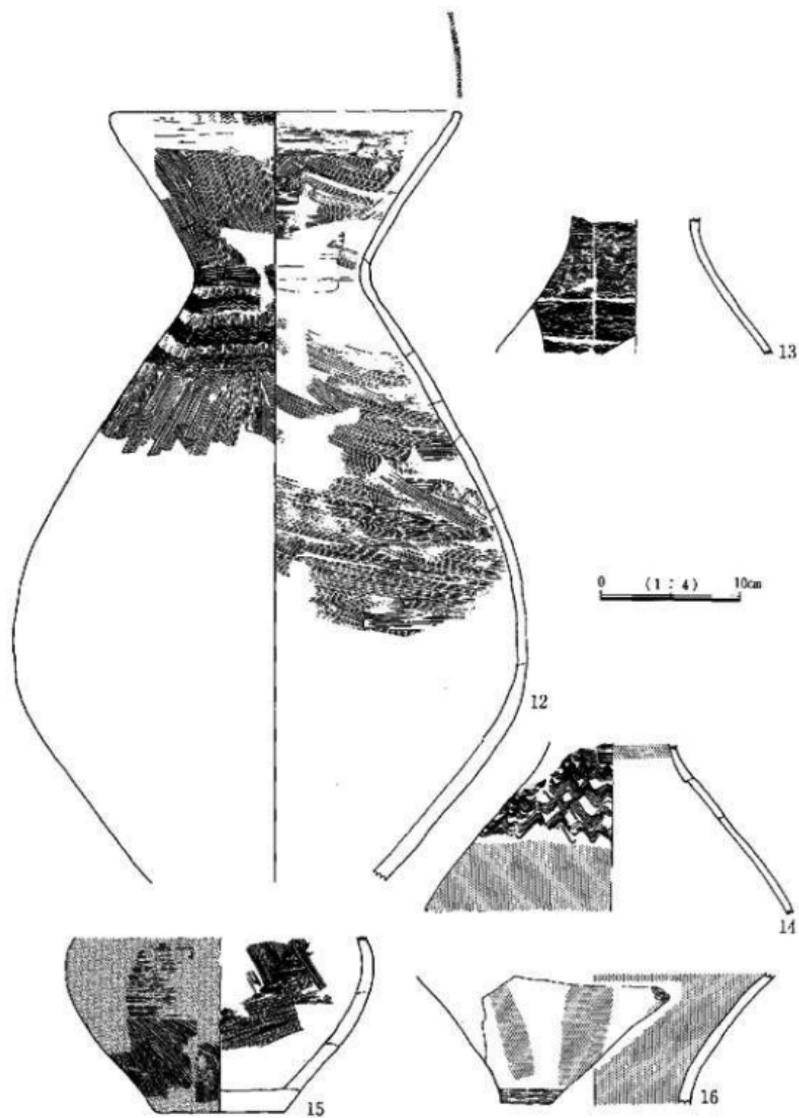


图12 2号住居跡出土遺物(4)

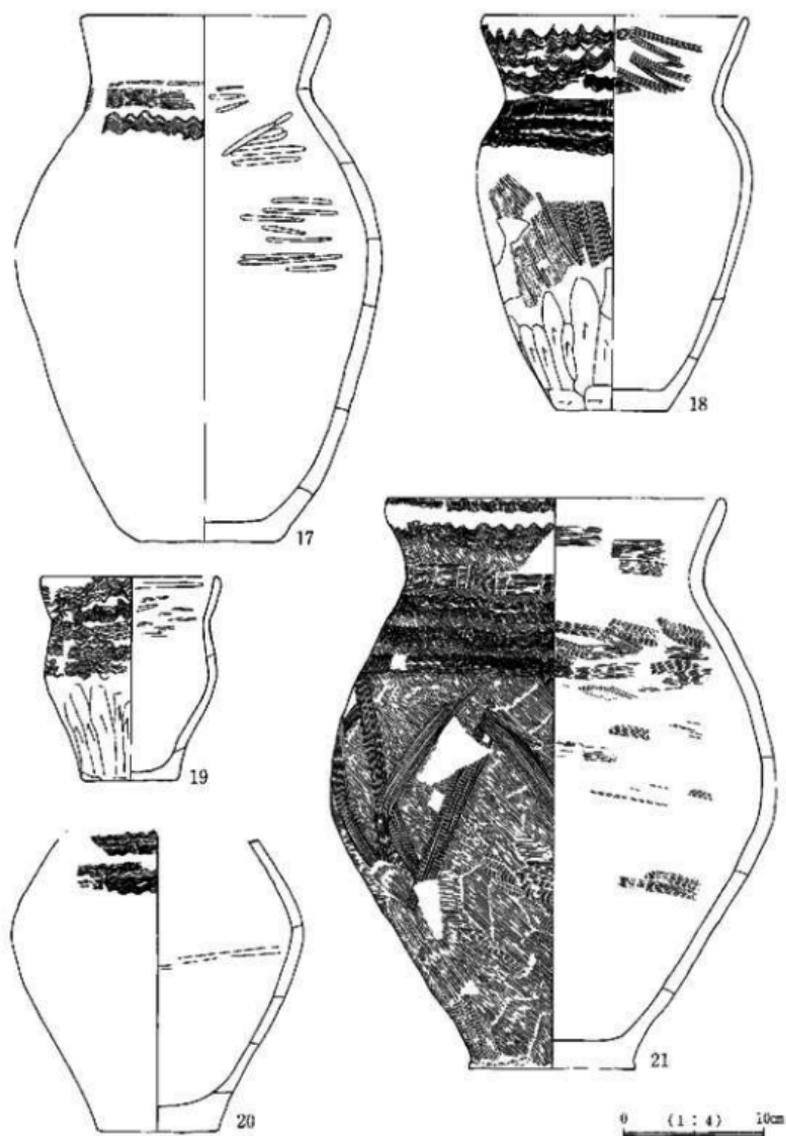


图13 2号住居跡出土遺物(5)

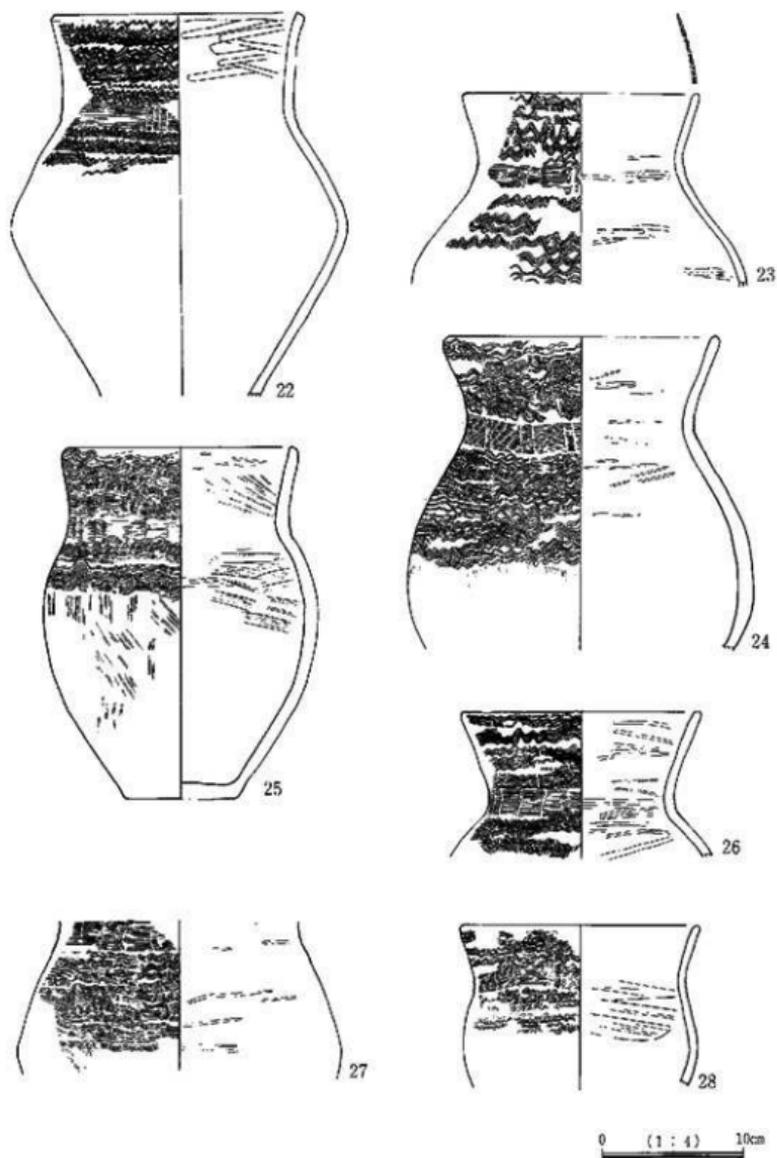


图14 2号住居跡出土遺物(6)

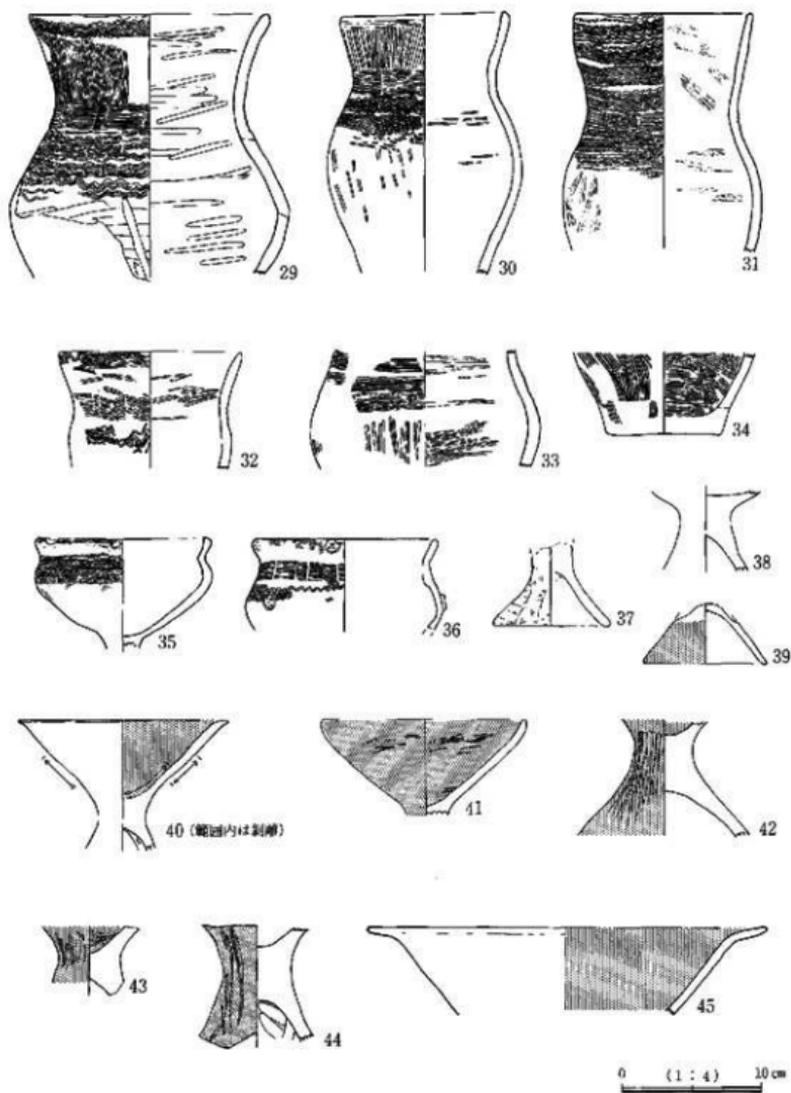


図15 2号住居跡出土遺物 (7)

表3 2号住居跡出土土物観察表(1)

No	器種	法 尺 (cm)	形 態	文様・調整など	色 調	残存
1	壺	口——底—— 高——最 47.0	算盤上状の大型直胴中位	胴上位の文様帯は羽状(?)の裾端状線が沈線に区画される。以下は部分的に縦ヘラミガキが残る。内面は割離が著しいが横ナゲナゲが認められる	外 淡褐色 内 淡褐色	胴中位のみ一周
2	壺	口——底—— 高——最(36.4)	しっかりしたつくりの壺	頸部等開閉扉状文で以下は羽状条線で文様帯を形成する。胴全体は縦ヘラミガキで仕上げられる。内面上半は横ナゲ	外 淡褐色 内 黒灰色	胴～胴下少々
3	壺	口(25.0)底—— 高——最(37.8)	胴下位に最大径をとり頸部まで直線的に内傾、口縁は外反意味に固く	頸部は横溝線文5状中に2本1対の沈線8単位でT字文を描き、以下は波状文4状を巡らす。口縁内面には横ナゲ線が残る。内面は割離が著しい	外 淡褐色 内 淡褐色	30%
4	壺	口22.5底—— 高——最 36.5	胴最大径部より幅かな表りで立ち上がり、口縁は直線的に外傾する	口唇直下に懸垂山形文、頸部以下は横線文、波状文、?連止扉状文の順で文様帯を構成し、横線文部は斜線を13本配しT字文とする。以下斜めハケナゲ	外 淡褐色 内 淡褐色	40%
5	壺	口——底—— 高——最——	やや重りをもつ胴上位	頸部は細かいT字文、胴上位の文様帯は波状文4状を付す。文様間には縦、以下には斜めのハケナゲを残す。内面は全体に割離が連んでいる	外 淡褐色 内 淡褐色	20%
6	壺	口(22.5)底—— 高——最——	やや重り口状の口縁部	頸部細かな等間隔線状文、口唇直下と頸部下に波状文、他はハケナゲだが消耗が著しい	外 淡褐色 内 淡褐色	口～頸部少々
7	壺	口——底—— 高——最(39.6)	胴下位に径をもち上半は直線的	外面縦～斜めハケナゲで径の直上は胴内面は全体に割離している	外 淡褐色 内 淡褐色	胴部
8	壺?	口——底(10.5) 高——最——	厚手の底～胴下位	外面縦ハケナゲ、内面横ハケナゲ	外 淡褐色 内 淡褐色	少々
9	壺	口——底—— 高——最——	大きく外反する頸部～口縁部	口唇上半斜めハケナゲ、頸部2連止扉状文。内面横ハケナゲ。外面全体赤彩	外 赤褐色 内 淡褐色	口縁半周
10	壺?	口——底(11.0) 高——最——	厚手でどっしりとした底～胴下位	外面横ハケナゲ、内面斜めハケナゲで少々割離している	外 淡褐色 内 淡褐色	20%
11	壺	口——底 9.7 高——最 27.2	中位に最大径をもち表りの無い長胴部	頸部2連止扉状文で口縁と胴上位は波状文、以下は縦～斜めヘラミガキ。内面横ヘラナゲ。外面最大径以下は赤彩がなされる	外 上半淡褐色、下半暗赤褐色 内 暗褐色	70%
12	壺	口(25.0)底—— 高——最 37.0	胴中～下位に最大径をとる丸みのある大型壺	頸部は2連止波状文でその下に開閉帯を置いて波状文を3条描く。口唇は縦文?による刻目と直下に波状文を付す。外面上半は縦、下半には斜めのハケナゲ線、内面は横ハケナゲが残る	外 暗褐色 内 淡褐色	80%
13	壺	口——底—— 高——最——	胴位つくりの頸部～胴上位	全体に起伏の小さい波状文が密に描かれる	外 淡褐色 内 淡褐色	頸部半周
14	壺	口——底—— 高——最——	頸部～胴上位	頸部等開閉扉状文、胴上位は4条の波状文で以下赤彩。頸部内面も赤彩	外 淡褐色 内 暗褐色	頸部一周
15	壺?	口——底 9.5 高——最(22.2)	底部より大きく外傾し中程?で内訂する	内外面ともハケナゲで、外面中位と内面下位は横、外面下位と内面中位は縦方向である。外面全体赤色塗彩	外 赤褐色 内 黒灰色	20%

表4 2号住居跡出土遺物観察表(7)

No	器種	法 泉 (cm)	形 態	文 様・調 色 など	色 調	残 存
16	甕	口——底—— 高——最——	大きく外反する唇 口縁部	頸部等間隔し彫状文、口縁部は縦溝状に赤 彩され赤彩部は腹ヘラミガキ、間は磨ヘラ ナダ。内面も全体に赤彩及び横ヘラミガキ だが磨耗が進んでいる	外 赤褐色 内 淡褐色 赤褐色	口縁 少々
17	甕	口 17.8 底 10.0 高 37.2 最 26.0	胴上位に張りをも ち短い口縁が立ち 上がる大甕	頸部2連止彫状文で胴下位に周巡らない波 状文1状、口唇は深み、内面は全体に磨 横ヘラミガキ。焼成軟質	外 赤褐色 内 褐色	80%
18	甕	口(18.5) 底 7.8 高 28.0 最(19.6)	肩の張る胴形、口 縁は外傾して立ち 上がる	口縁には筋文、肩部には細かな波状文頸部 は2連止彫状文、口唇には横文を付す。種 文筋の調整は口縁と胴中位が縦へらめハケ ナダ、肩部横ハケナダで胴下位は横ヘラケ ズリ、底部直上は横ヘラケズリ。内面は口 縁に横ハケナダがよく残る	外 肩部以上黒 灰色で他は 淡褐色 内 淡褐色で胴 下位は黒ず む	40%
19	小甕	口 12.6 底 7.0 高 14.5 最——	全体に華な作り、 底部は厚くどっし りしている	口縁へ肩部は華な波状文で頸部は細かな等 間隔止彫状文、以下縦ヘラケズリ、口縁内 面横ヘラミガキ	外 褐色 内 上半のみ黒 灰色	60%
20	甕	口——底(8.7) 高——最(20.6)	胴上位に張りをも ち中へ下位はやや こける	上位に彫状文、以下縦ヘラケズリだが磨耗 しており不明瞭。内面部分的に横ヘラミガ キ残るが縦で平滑ではない	外 淡褐色 内 黒灰色	30%
21	甕	口 23.8 底 11.8 高 40.5 最 31.7	小さい底部、胴下 位は張りがなく中 位に最大径をとる 大甕	口縁唇上位と中位に1状ずつ、胴上位に3 状の波状文を付し、頸部は2連止彫状文、 胴中位には山形文の重畳を巡らす。口縁に は縦、以下は斜めのハケナダが文様間に残 る。内面は横ハケナダで全体にナダ消しな れる	外 淡褐色で中 位のみ黒炭 する 内 灰褐色	ほぼ 完形
22	甕	口 17.5 底—— 高——最 23.7	口唇取りで新鋭 三角形、胴下半や やこける	口縁へ胴上位は縦溝状文、頸部1連止彫状 文、胴下半横ナダで最下位横ヘラケズリ、 内面横ナダ	外 淡褐色 内 黒灰色	50%
23	甕	口(16.5) 底—— 高——最——	比較的強い筋れの 新鋭より口縁が直 線的に外傾する	頸部は2連止彫状文で口縁と胴上位は波状 文が完成される。口唇は深み、内面横ヘラ ミガキ	外 暗褐色 内 淡褐色	頸部付 半分尚
24	甕	口(19.5) 底—— 高——最(24.7)	胴中位より緩やか な曲線を描き、口 縁は外傾する	口縁へ胴上半は波状文を密に施す、頸部 は2連止彫状文、胴部には細かな刻み ハケナダ調整が残る。内面全体横ヘラミガキ	外 胴中位黒褐 色で他は淡 褐色 内 淡褐色	30%
25	甕	口(16.6) 底 8.2 高 25.0 最 19.7	胴上位に張りをも ち緩やかな曲線で 立ち上がる。全体 に厚手	口縁へ肩部は波状の小さい波状文を密に施す 頸部は2連止彫状文、口唇には細かな刻み を巡らす。胴上位以下は縦ヘラミガキで滑 らかに仕上げられる。内面は口縁横ヘラミガキ、 胴部横ハケナダ	外 褐色で肩 部と底は黒 ずむ 内 暗褐色	70%
26	甕	口(17.6) 底—— 高——最——	頸部より直線的に 外傾する口縁部	頸部等間隔し彫状文、口縁全体と胴上位に 波状文、口唇は深み、内面全体に横ヘラミ ガキ	外 暗褐色 内 淡褐色	口へ頸 部少々
27	甕	口——底—— 高——最(23.0)	胴中へ上位に波 状の張りをもち頸 部へ内傾する上位	頸部は狭い等間隔彫状文、胴上位は波状文 を密に施す以下はハケナダが少々残る。内面 横ヘラミガキ	外 暗褐色 内 褐色	胴部上 位少々

表5 2号住居跡出土遺物類聚表(3)

No	器名	寸量 (cm)	形態	文様・調塗など	色調	残存
28	壺	口 17.0 底 — 高 — 最 —	短い口縁が外傾して立ち上がる	口縁~胴部は起伏の小さい波状文を充ちし類部は不規則な雁状文(止め部は剣状文門跡)。焼成やや軟質	外 淡褐色 内 淡褐色	20%
29	壺	口 17.2 底 — 高 — 最 20.0	縁の強い頸部より長い口縁が外反、紐大径は胴上位にありケズリにより強い段となる	口縁上端と胴部に波状文、頸部は2連止葉状文で口縁の大半は短文せず縦ハケナゲのまま。胴中位横ヘラケズリで以下は緩らしい。内面は全体に横ヘラミガキ(内置部分的に赤彩残る)	外 淡褐色 内 淡褐色	50%
30	壺	口(11.6) 底 — 高 — 最(14.0)	胴上位に張りをもつ、透文・焼成とも良好な仕上がり	口縁縦ハケナゲで口唇付近は横ナゲ、胴部2連止葉状文、胴部2条の波状文、以下は縦ヘラミガキ。内面は横ナゲ及び横ヘラケズリ	外 暗褐色 内 上半黒灰色、以下は黄褐色	40%
31	壺	口 12.8 底 — 高 — 最 14.2	胴部より縁の強い頸部を経て口縁が長く立ち上がる、縦長い壺	胴部に2連止葉状文を巡らせ、口縁~胴上位は細かな波状文、以下縦ハケナゲ及び縦ヘラミガキ。口唇は刻みを巡らす。内面横ハケナゲ及び横ヘラミガキ	外 暗褐色 内 淡褐色	60%
32	小型器	口(13.0) 底 — 高 — 最 —	広い口縁が外反気味に立ち上がる	頸部に2連止葉状文、口唇直下と胴状文下に波状文。内面横ヘラミガキ	外 暗褐色 内 淡褐色	20%
33	壺	口 — 底 — 高 — 最(16.4)	厚手に小ぶりの胴中~上位	頸部は他との間隔が稍い2連止葉状文で直下は起伏の小さい波状文、下半には縦ヘラミガキ。内面横ヘラミガキ	外 暗褐色 内 暗褐色	30%
34	壺?	口 — 底 8.2 高 — 最 —	美の極部と思われる	外面は縦、内面は横のハケナゲ	外 淡褐色 内 淡褐色	底部一層
35	小型台付壺	口 12.6 底 — 高 — 最 —	偏味化した樹状胴部で縁は受け口気味に開く	口唇と頸部付近に細かな波状文を描き等間隔の円形浮文を上下6箇所ずつ互い違いに付す。胴部縦ハケナゲ残る	外 口~頸部黒灰色以下赤褐色 内 暗褐色	胴部のみ欠損
36	小型台付壺	口 12.8 底 — 高 — 最(14.4)	肩の張る器形で下位はすばまり脚付きと思われる	頸部2連止葉状文で口唇直下を雁状文下に波状文を描く。波状文部には朝典のある円形浮文を等間隔に4箇所ずつ互い違いに付すようである	外 淡褐色 内 暗褐色	口~胴部一層弱
37	台付壺	口 8.5 底 — 高 — 最 —	ラッパ状に開く小型台付突脚部	上唇縦ヘラミガキ、頸部横ナゲ、内外面とも磨耗が進む	外 淡褐色 内 淡褐色	胴部一層
38	台付壺	口 — 底 — 高 — 最 —	台付突脚~胴部片と思われる	胴部外面縦な縦ヘラミガキ、内面横ヘラナゲ	外 暗褐色 内 暗褐色	脚付近片
39	台付壺	口 — 底 8.8 高 — 最 —	やや膨らみをもつ台付突脚部と思われる	外面磨耗が激しいが所々に赤彩が認められる	外 赤褐色 内 淡褐色	胴部の70%
40	高環	口(15.0) 底 — 高 — 最 —	張りの小さい体部で口縁は先端尖り気味で水平に開く	内外面全体に刻線が激しい。体部内成横ヘラミガキで赤彩、胴内面ヘラナゲ口縁外面横ナゲ	外 黄褐色 内 赤褐色 淡褐色	50%
41	高環	口 14.5 底 — 高 — 最 —	外傾する体部より口縁は内湾気味	内外面とも磨耗が横ヘラミガキで、赤色赤彩されている	外 赤褐色 内 赤褐色	体部半周
42	高環	口 — 底 — 高 — 最 —		外面縦ヘラミガキ、胴部外面と体部内面は赤彩	外 赤褐色 内 淡褐色	少々

表6 2号住居跡出土遺物観察表(4)

No	器種	法 量 (cm)	形 質	文 様・調整など	色 調	残存
43	高 坏	口 — 底 — 高 — 最 —		外面腹ヘラミガキ、内部内面下位ユビナデ及び横ヘラミガキ、両面共に赤彩体部僅割れ口は接合部のため水平	外 赤褐色 内 赤褐色	少々
44	高 坏	口 — 底 — 高 — 最 —	大盛で厚手の蓋〜脚部片	外面腹ヘラミガキ、脚部内面ユビナデ脚部内面以外には赤色塗彩がなされる	外 赤褐色 内 淡褐色	脚部片
45	鉢	口(28.5) 底 — 高 — 最 —	外傾する体部より口縁が水平に開く	口縁横ナデで体部は斜めのヘラケズリらしき痕跡が残る。内面は赤彩	外 淡褐色 内 赤褐色	20%

## 第4章 まとめ

本遺跡では、弥生時代後期の埴式土器を伴う竪穴住居跡2軒が検出された。しかしながら、道路改良（歩道敷設のための拡幅）が調査原因であるため、僅かな調査区域に住居の一部がかかったにすぎない。付近一帯に該期集落の存在は推定し得るがその範囲には言及出来ず、該期遺跡の分布域を示す一資料であるとしてだけ述べておく。

さて、ここでは比較的遺存状況の良い2号住居跡の規模について、県内の類例を参考にして考えてみたい。検出面積は少ないが、ピットや壁の軸ははっきりしているのがあながちの外れにはならないであろうし、他の事例と対照することで何らかの規則性が得られればと思う。

本遺跡2号住居跡（以下2住という）の規模推定図を図16に示し、以下、これに添って述べる。

P1～P3の3基は床面での径は小さいものの、ボーリングで深さ1m程と考えられ、北壁及び南壁のラインとの位置関係より本住居に伴う主柱穴としてよいだろう。これを基に推定したラインがacfh及びadehである。尚、県内での該期の住居形状はその殆どが（隅丸）長方形でありこれを基本と考えても大きな間違いはないであろう。

西壁については、hが南西コーナーと判断できるので、bcの延長線上のaとhを結ぶahである。これに伴う北壁はac、南壁はhfまでが確実な範囲といえる。全体のプランについてはP1～P3との位置関係（軸、壁までの距離）とよく対応しており、c～a～h～fまでを一応想定出来る。この場合、区域外にピット「A」の存在が予想され、A及びP1～P3の4本主柱が考えられる。しかし、この住居プランと柱穴との位置関係をみると、西壁ahと柱穴ア-P1軸との距離1.6mに対して東壁cfと柱穴P3-P2軸では約3mと2倍近くあり、主柱が西へ寄る形になってしまう。またc部分では竈（f）側への曲がり込みが検出されていないので、c（及びf）を住居コーナーとするには少々無理がある。以上より住居プランをadeh(8.4m×6.6m)とし、これに伴う柱穴をア～ウ

の推定柱穴及びP1～P3の6基と

考えてみたい。

比較的穴型の住居の場合、南関東では4本主柱の間隔を広げるが、北関東・中部地方では間隔を変えずに柱数を増やすことが多いとされている。県内における埴式土器を伴う住居で、6本主柱の例をピックアップし、図17と表7に示す。高崎市新保遺跡で5例、高崎市八幡遺跡で2例、富岡市阿曾岡・権現堂遺跡（阿曾岡

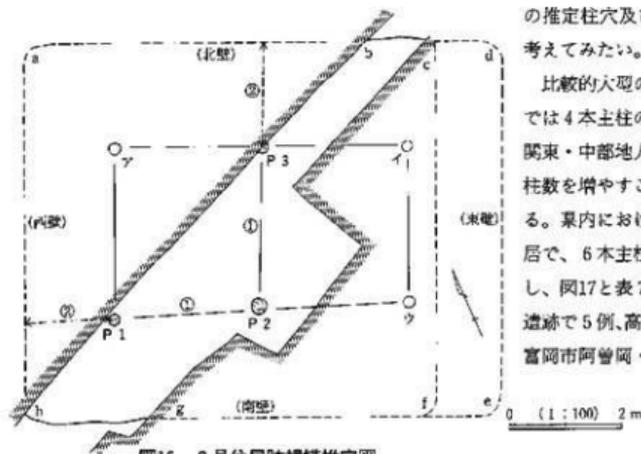


図16 2号住居跡規模推定図

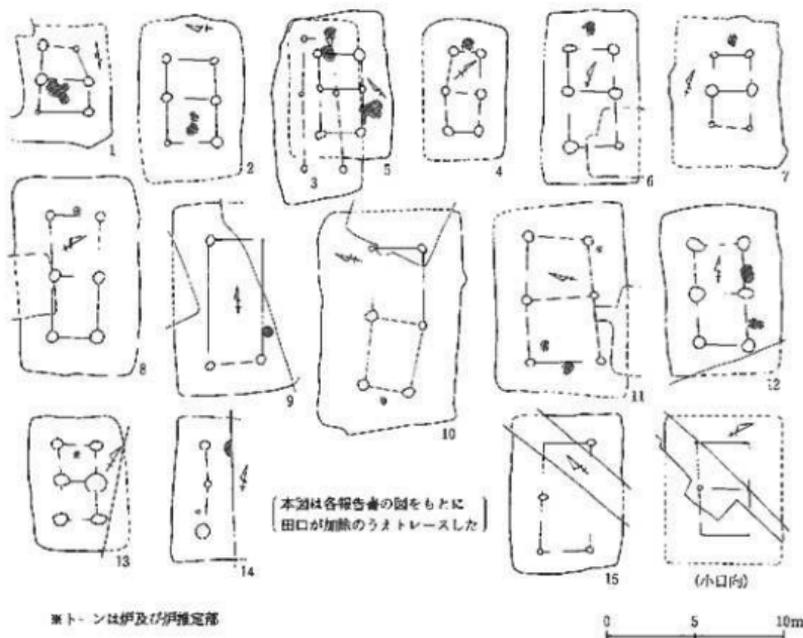


図17 群馬県内の6本主柱とされる櫓期住居

表7 群馬県内の6本主柱とされる櫓期住居の概要

No	遺跡名	住居	形状	平面規模(m)	長短比	伊(形態・位置など)	その他
1	新保	126号	不明	6.7 × ?	不明	住居中央部暖土帯の可能性	遺存状況不明、木束の形状不明
2	#	160号	長方形	9.5 × 6.0	1.6	北側中央に地床が1	外側の短柱間に柱穴各1あり
3	#	161号	#	10.4 × 4.8	2.2	不明	5との先後関係は不明
4	#	166号	#	7.7 × 4.8	1.6	住居北西部に地床が1	喪失家屋
5	#	169号	#	8.5 × 5.5	1.5	地床が1、竈の可能性がある	
6	八幡	45号	#	13.2 × 7.2	1.8	北壁側中央、不整形	八幡遺跡での最大規模
7	#	48号	#	11.5 × 8.2	1.4	北壁側中央、楕円形	柱穴規模(径、規模)の差異著
8	阿曾岡・権規益	62号	#	11.5 × 7.1	1.6	北壁側中央に石築地床が1	喪失家屋
9	#	90号	不明	11.0 × ?	不明	検出部南東に石築地床が1	喪失家屋
10	#	101号	長方形	12.2 × 8.0	1.5	南側と北東部に石築地床が1	喪失家屋
11	南蛇井増光寺	174号	#	10.8 × 7.5	1.4	石築地床が2と無石地床が1	B区最大規模
12	諸口!!!	4号	#	9.5 × 7.0	1.4	住居東側の焼土帯2箇所と推定	
13	西浦南	1号	#	7.7 × 5.6	1.4	住居北側中央に石築が1	ベッド状遺構が3箇所ある
14	#	4号	不明	8.1 × ?	不明	北側に石築が1と南側焼土帯1	4本主柱から6本主柱へ大型化
15	下川田平井 小日向遺地谷戸	2号 2号	長方形 (長方形)	9.0 × 6.5 (8.4) × 6.8	1.4 (1.3)	不明、トレンチ内を推定 (住居北半部分)	火災を受けている ( ) は推定

・形状は「隅丸」の基準が曖昧なために使用せず「長方形」にとどめた。

・長短比は、短辺を1としたときの長辺の値である(小数点2位以下四捨五入)。

・伊及び「その他」欄では各報告書の見解を記してある。

地点)で3例、高岡市南蛇井増光寺遺跡(B区)で1例、群馬町瀧口遺跡(Ⅲ)で1例、群馬町西瀧南遺跡で2例、沼田市下川田平井遺跡で1例の、計15例である。当然、他にも類例はあることと思うが、管見に触れた主なものであることをお断わりしておく。

さて、これらのうち形状と共に6本主柱が判断できるのは2~8、10~13の11例と考えられる。その他については形状不明(1、9、14)、6本主柱が確定でないもの(9、14、15)となるが、15では残存する主柱穴の深さとトンチの深さが同程度なため、6本主柱のうちの2基がトレンチに切られた可能性が高い。これは残存する住居プランや柱穴列の整い方からも窺われる。同様に整った形状と配列を示す14についても、長方形かつ6本主柱である可能性が高いと思われる。1は、東側の柱穴列が乱れており、報文中では6本主柱としながらも「確定とは言い切れない」としている。9は、柱穴が3基のみで、プランも東側が重複造構に切られるために不明である。報文中では「6本柱になると考えられるが、南北間の中間に柱穴は確認できなかった」としている。また、全体的にみると、同軸での柱間距離は概ね等しく、明らかに違う柱間のあるのは1、3、6の3例である。また、長・短軸共に等間隔のものも多い。さらに、柱間距離(図16-①)とその延長線上での柱穴一住居壁までの距離(図16-②)をみてみると①>②が殆どで、①<②になるのは1、5、7の一部のみである。

住居全体プランに対する柱穴列の位置(配置)では、形状が不明な1、9、14以外の全てにおいてその中心は住居中央にあり、四方どの側にも片寄らないことが分かる。

炉の位置については、ひとつの傾向として住居短辺の北側近くに多く、4~8及び13、14がこれにあたる(複数炉の場合も含む)。

以上1~15について、図7及び表7と今まで述べたことをまとめると以下のとおりとなる。

- ① 6本主柱の住居形状は長方形で、長辺は短辺の1.4倍以上である。
- ② 同軸での柱間距離は基本的に等しく、別軸向きでも等しい傾向がある。
- ③ 「柱間距離」と「その延長線上での柱穴と住居壁間の距離」は、同程度もしくは柱間距離の方が大きい。
- ④ 6本主柱の配置は住居の中央であり、片寄りは見られない。
- ⑤ 炉の位置は住居の短辺かつ北側に多い。

これらのことより、先に想定した本遺跡2住の規模 adef とこれに伴う未検出の柱穴ア〜ウについては可能性が高いと考えておけるが、この場合、長短比が1.3となるので①を参考にすれば東西両壁はもう少し広がるはずである。また、炉の位置は⑤より abh の範囲内とみておきたい。

#### 引用参考文献

- ・宮本良二郎「住居と倉庫」『弥生文化の研究・7』1986 雄山閣
- ・佐藤明人ほか「新保遺跡Ⅱ」1988 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ・神戸聖強ほか「八幡遺跡」1989 高崎市教育委員会
- ・藤原徳司ほか「東八木遺跡、阿曾岡・権現堂遺跡」1997 高岡市教育委員会
- ・伊藤 肇ほか「南蛇井増光寺遺跡Ⅰ」1992 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ・飯島克己ほか「瀧口遺跡Ⅲ」1985 群馬県教育委員会
- ・若狭 敏ほか「西瀧南遺跡」1988 群馬県教育委員会
- ・神谷佳明ほか「下川田下原遺跡、下川田平井遺跡」1993 群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡地遠景 (ドット位置)



1区表土除去



1号住居跡遺物出土状況



1号住居跡遺物出土状況  
(9・10)



1号住居跡実測

図版 2



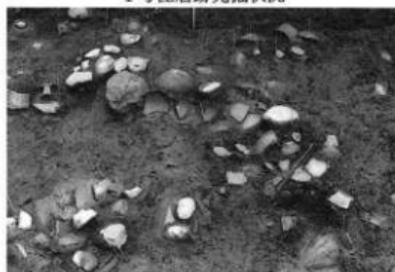
1号住居跡 (P1)



1号住居跡完掘状況



2号住居跡遺物出土状況 (上~中層)



同左



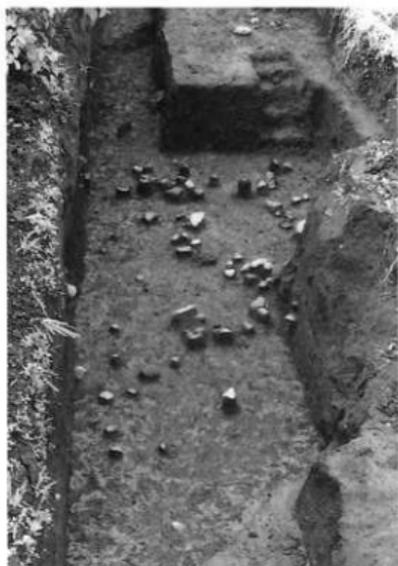
同左 (41)



同上 (10)



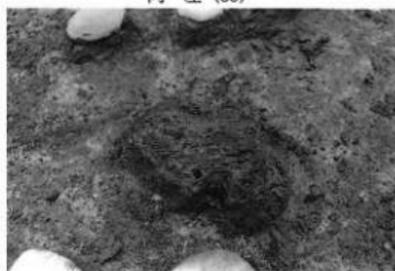
同上 (29)



2号住居跡遺物出土状況 (下層)



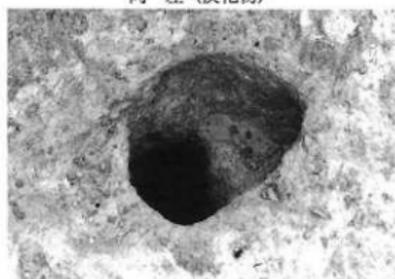
同左 (35)



同左 (炭化物)



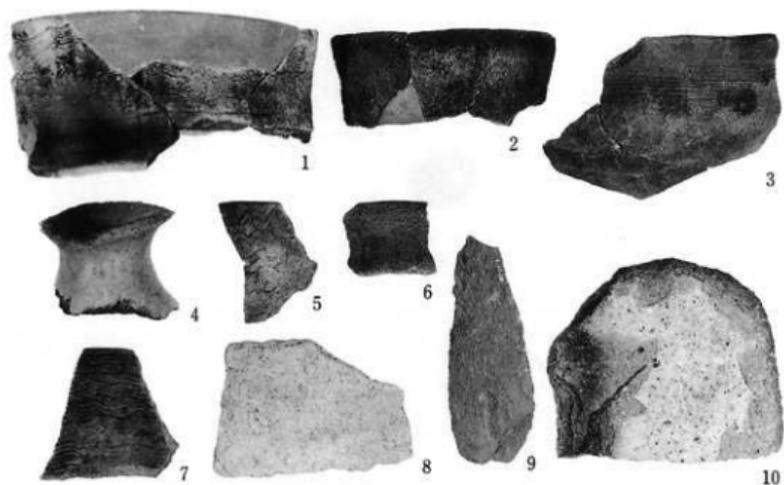
2号住居跡完掘状況



同左 (P2)



2号住居跡 (2区) セクション



1号住居跡出土遺物 (1~10)



2住-1



2住-2



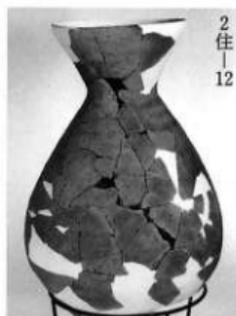
2住-3



2住-4



2住-11



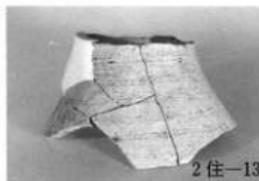
2住-12



2住-5



2住-9



2住-13



2住-14



2住-15



2住-16



2住-17



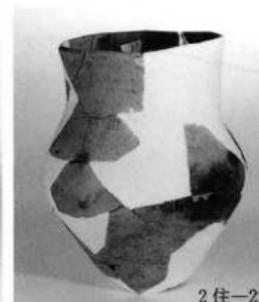
2住-18



2住-19



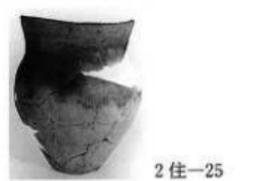
2住-21



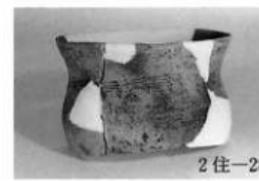
2住-22



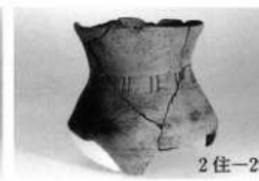
2住-24



2住-25



2住-28



2住-29



2 住-30



2 住-31



2 住-33



2 住-35



2 住-36



2 住-40



2 住-41



2 住-44

## 抄 録

ふりがな	おびなたとおじがいでいせき
遺 名	小日向遠地谷戸遺跡
副 題 名	(一) 長久保・安中線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	松井田町文化財調査報告書
シリーズ番号	第8集
編 著 者 名	田口 修
編 集 機 関	松井田町教育委員会
編集機関所在地	〒379 02 群馬県碓氷郡松井田町大字新堀245
発 行 年 月 日	1994年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小日向遠地谷戸遺跡	群馬県碓氷郡松井田町小日向字遠地谷戸1155-1 他	104019		36°19'20"	139°28'80"	19930628- 19930810	106㎡	道路拡幅

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小日向遠地谷戸遺跡	住居跡	弥生後期	竪穴住居跡 2	土器(壺、甕、高坏、浅鉢など)	該記の良好な土器資料である。

松井田町文化財調査報告書第8集

小日向遠地谷戸遺跡

—(一)長久保・安中線改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成6年3月31日発行

編集・発行 松井田町教育委員会

〒379 02 群馬県榎本郡松井田町大字新堀245

☎0273(93)1111

印刷 朝日印刷工業株式会社